

宮川の風 第65号

平成30年11月9日(金)発行
宮川小学校校長室からのたより

11月5日は、「津波防災の日」でした。これは、2011年3月の東日本大震災で甚大な被害が発生したことから、津波被害から国民の生命、身体・財産を保護することを目的に「津波対策の推進に関する法律」が制定され、この法律で毎年11月5日を津波防災の日とすることになったそうです。

この「11月5日」には一つの逸話が関係しています。1854(安政元)年の安政南海地震が起きた際の和歌山県広村(現・和歌山県広川町)でのことで、それは次のような話です。

村の高台に住む庄屋の五兵衛は、地震の揺れを感じたあと、海水が沖合へ退いていくのを見て津波の来襲に気付く。祭りの準備に心奪われている村人たちに危険を知らせるため、五兵衛は自分の田にある刈り取ったばかりの稲の束(稲むら)に松明で火をつけた。火事と見て、消火のために高台に集まった村人たちの眼下で、津波は猛威を振るう。五兵衛の機転と犠牲的精神によって村人たちはみな津波から守られた。

この話は、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)の「A Living God」に著されているそうです。

裏面の話をお読みください。

コロッケさんの話は、昨年度の6月に発行した宮川の風第10号にも掲載しています。10枚の折り紙を分け合おうとする女の子も、うどんを待つ列に並んでいた少年も、非常に辛く苦しい状況の中では「神様」のような存在に思えます。「誰かのために」という思いの尊さを教えられます。

小泉八雲の「A Living God」は日本語訳すると「生き神様」です。刈り取ったばかりの稲の束(稲むら)に火を付けて、消火に集まった村人たちを救った行動は、まさに「神様」なのかもしれません。

HPのブログにもアップしてありますが、6日火曜日に4年生の半成人式がありました。子どもたちからお家の人への感謝の言葉は、普段はなかなか言えないものですが、式の中ではしっかりと感謝の手紙としてお母さんお父さんに伝えていました。涙を流しながら我が子を抱きしめる保護者の方々の姿を見て、親子の愛を深く感じた時間になりました。

来週は、学年ごとに人権教室を行います。人権擁護員の方においでいただき、ビデオを視聴しながらご指導いただきます。各ご家庭でも、私たちの身の回りにある人権問題について考える機会にさせていただきたいと思います。

ある日のできごとから



火曜日の朝のことでした。プール横のブルーベリーロードで登校の様子を見ていました。ほとんどの子どもたちが、立ち止まってあいさつをしていきます。気持ちのよい朝だなあ、と思いながらいると、グランド公園の横でランドセルを下ろして何かをしている子どもがいました。しばらく見ていましたが、なかなかその場から動きません。どうしたのだろうと思い近寄っていききました。すると、途中で靴を汚したらしく、水道で靴を洗い流していました。もうすっかりきれいになっていたもので、「もうだいじょうぶだよ。(水に濡れて)冷たいだろうけど学校に行こう」と言うと、その子は「ありがとうございます」と言って、濡れた靴を履いて歩き出しました。その「ありがとうございます」の言葉が自然と出たことに感心しました。

別の日、6区側の横断歩道に立っていると、いつものように気持ちよいあいさつをしていく女の子の手に、お菓子の袋かなと思える物を見つけました。あきらかに汚れた袋でした。「途中でごみを拾ってきたの?」と聞くと「はい」と言う返事。登校途中で進んでごみを拾うその姿に感心しました。

二人とも自然と善い行いができていることが素晴らしいと感じました。

(文責; 鹿児島市立宮川小学校長 松永幸二)